

おしゃべりひめは、ふあんにおもいながら、まっくらななかで、ときどきふりかえる、ねこのめをおいながら、そろりそろりと、あるきだしますと、ふしぎにもせまいとおもったろうやは、たいへんにひろくて、どこまでいっても、つきあたりません。そのうちに、なんだか、のはらにきたようで、はいているくつのさきに、はっぱがатарるようです。なおよくきをつけてみると、あたまのうえには、そらがあって、くものあいだから、ほしがひかっています。「まあ。やっぱりねこは、ほんとうにあたしをたすけてくれたのね。だけどいったいここは、どこなんだろう」と、そこいらをみまわしました。そうすると、やがて、あたりがあかるくなって、まだ、みたこともない、やまやかかわや、もりやいえが、みえてくると、むこうのくものあいだから、まっかなおてんとうさまが、ぴかぴかかがやきながら、でてきました。そうして、そこいらいちめんにさいているはなも、てらしました。そのときにきがつくと、まんまえのねこは、どこへいったか、かげもすがたもなくなっていました。おしゃべりひめが、ほんやりしてたっていますと、まもなくうしろのもりのな

かから、ふたりの、ひゃくしょうのふうふらしいものが、でてきましたが、だんだんちかづいてみると、なんということでしょう。それは、にんげんのすがたをしたひばりで、おしゃべりひめのすがたをみつけるとびっくりして、たちどまりました。そうして、ふたり